

ピエール・ブルデューの『実践感覚』を読む

(4)ブルデュー社会学における身体性と実践の論理

安田 尚

今回は「第四章 信仰と身体」と「第五章 実践の論理」を読んでみることにしよう。これらの章は社会学における行為論としては、きわめてオリジナリティの高いものである。なぜなら、従来の社会学が対象化でぎざぎざいた行為における身体と時間の問題に光が当てられているからである。実践が身体運動に担われていること、また時間が実践の意味を形成していることが述べられている。こうした実践にとって不可欠な要因であり、行為の

構成要素にほかならない身体と時間が、なぜか従来の社会学では見落とされ、「見えざるもの」になっていたのである。

科学とは「見えざるもの」「隠されたもの」

「検閲されたもの」の明示化である

ちなみにいえば、ブルデュー社会学が果たそうとした科学の使命は、こうした「見えざるもの」、「隠蔽された

もの」、外的あるいは内的な「検閲」に対する挑戦にほかならない。ブルデューは「おおい隠されたものについてしか科学は成り立たない」、つまり科学の任務は「隠されたもの」を明らかにすることであると主張している（註1）。関係や過程だけでなく、身体や時間も「見えざるもの」なのである。

第四章では、「場」に所属することは「場」の「身体化」であること。さらに、この場への所属⇨参加は意識化、対象化することなく「場」のルールを「信仰」（疑うことなく受容）すること。つまりそれは、「場」との一体化（⇨身体化）であり、「場」の価値（⇨賭け金、利害）やルールを信じることである。

「実践感覚とは「場の要求に対する先取りの調整」

さて、第四章の冒頭は次のようにはじめられている。「身体表象も世界表象も全く想定せず、ましてや身体—世界関係の表象も想定しない準—身体的な世界志向、何

をなすべきか、何を言うべきかが直ちに身振りや発言を命ずるが、こうした急迫性が押し迫ってくる世界への内在、このようなものが実践感覚であり、それが様々な『選択』を決定する」（一〇五頁）。

つまり実践感覚とは、身体や世界、さらに身体とそれをとりまく世界との関係についての表象（イメージ）を媒介にすることなく、世界と直接対峙する「身体的な世界志向」だということである。「世界への内在」とは、世界の外側においてただ眺めているだけの気楽な立場に身を置いているのではなく、何かをしなければならぬ地位と役割を担っていて、十分に考える暇もない切羽詰った状態なのである。こうした「実践感覚」が、行為者の日々余儀なくされる「選択」を決定しているのである。

しかもこの「選択」は「熟慮されたものではないが、それでもやはり体系的であり、目的に照らして秩序づけられ組織されているわけではないが、それでもやはり一種の回顧的目的性を帯びている」（一〇五頁）。すなわ

ち、実践感覚がおこなう「選択」は、目的合理性にもとづいた合理的計算によるものではないが、にもかかわらず体系的であり、あとで考えてみれば何かの「目的」の追求であったがごとき戦略性がうかがえるほど「理に適った」選択をしているのだ。

このように実践感覚は、目的意識性の追及ではないにもかかわらず何かを達成しているわけだが、これがなぜ可能なのだろうか？ それは、実践感覚が「場の諸要求に対する先取りの調整」をしているからである。自分が参加している「場」（学校であれば「教育の場」であり、アカデミズムであれば「科学の場」、また芸術家にとっては「芸術の場」など）が求めてくるであろうことに実践を「先取りして調整」しているからである。

ゲーム感覚とは？

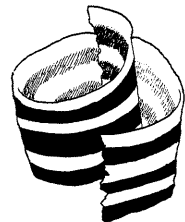
ブルデューはこうした実践感覚のニュアンスを理解するための好例として、スポーツ用語でいう「ゲーム感

覚」とよばれるもの（＝

「投資（運用）感覚」、先取り）技法などをあげている。これは、あえていえば「ゲームの勘」（註2）

とでもいえよう。明示化しにくい事柄ではあるが、たしかにゲームや勝負の過程では、ある種の感覚や能力が働いているといえる。

この「ゲーム感覚」は、身体化された歴史であるハビトゥスと客体化された歴史である場との出会いを理解する点で役立つものとされる。この「出会い」、つまり実践は、ゲームのあらゆる具体的形態のなかに刻印されている「未来のほぼ完全な先取り」を可能にする（一一一頁）。現在の中に察知して、やがて来るであろう未来を先取して反応するのが、ゲームのセンスであり、実践感覚である。これは、ブルデューによれば現象学のフッサールが「先把握」と呼んだものである。つまり「先把握



持とは、現在の中に刻み込まれている、ということとはつまり、すでにそこにあると了解され、現在の信憑的様態を帯びているへ来たるべきもの *à-venir* を実践的に目指すこと」である（註3）。

またこの「ゲーム感覚」は、行為者の主観から見れば「ゲーム経験の産物」であるが、同時にゲームの「客観的構造の産物」でもある。つまり、ゲームのセンスはゲームへの参加と、ゲームの体験を通して学習される。それは、「子供の遊びへの参加によって獲得される」のである（註4）。ゲームに参加するとは、そのゲームの「賭け金」、「利害」（＝損得）、ゲームの「前提」に同意することである。つまり、ゲームに身を投じている者は、ゲームでの勝ち負けを決める獲得対象（政治の場合なら「権力」であろうし、経済の場合なら「利潤」、芸術の場合であるなら「美」など）に価値を認め、ゲームの勝ち負けをさめるルールを承認しつつ、ゲームに打ち込む（投資する）わけである。

しかしこのゲームの例示にも限界がある。すなわちゲームにおける「場（すなわちゲーム空間、ゲームの規則、ゲームの賭け金など）」は、明白に恣意的で人工的な社会的構成物」である（一〇七頁）。これは「対自的ゲーム」、つまり自覚的に選んで参加したゲームであるのに対して、「即自的ゲームである社会的場」では、「意識的な行為によってゲームに参加するのではなく、ゲームの中にゲームとともに生まれる」のである（一〇七頁）。

したがって、「信仰・イリュージオ（錯覚、思い込み）・投資の関係は、それとしては自覚されないだけに一層全面的で無条件である。『認識コグニションするとは共にコ・ネクト生まれることである』というクローデルの言葉はここでは全面的に妥当する」（一〇七頁）。ある特定の場に生まれることによって身体化された実践感覚は、意識化されたり、言語化されたりすることなく文字通り身の内ウチとなって、その社会的場において機能するのである。何かを達成するた

めに手段として神を信じるというのではない信仰とか、他人から見ればこっけいな思い込みとか、何かに憑かれ入れ込んでいる状態などは、もはや意識化されることのないものである。

このような実践感覚の形成過程と「ゲームの学習」の関係は、「母語の学習」と「外国語の学習」との関係と同じである。つまり、「外国語の学習」が意識的な文法規則などの学習であるのに対して、「母語の学習」では「言葉を話すことを学ぶと同時にその言葉の中で（この言葉とともにではなく）考えることを学ぶ」のである（一〇八頁）。つまり、考えるという意識の根源を支えている母語は、身体化された言語なのである。

「実践の論理」と学問的知

ブルデューは第五章において、従来の学問の限界は実践を「機械モデルの言語」でしか語れない点にあるとしている（一二九頁）。たとえば、経済学は経営者を市場

に機械的に従属する者として、また民族学は行為者を社会的ゲームに参加しない存在としてしか語れない。つまり、従来の行為理論は行為主体の「実践の論理」を欠いた「機械モデルの言語」でしか実践を問題にできなかったというのである。「しかもその実践が外見上、特に機械的で、思考と言説の論理に対立する程度がより大きい場合、実践はネガティブにしか語れないのである」。

なぜこうした行為理論が横行してきたのだろうか？

それは「意識の言語と機械モデルの言語」という分類が、支配的な世界観の基本的な分類に対応していたからである。こうしてブルデューは次のように、従来の行為論に対する精神分析を試みる。「つまり、自らについて考える場合と他人（つまり他の階級）について考える場合を分けて、社会的世界についての言説を独占しようとする者たちは、自らに対しては進んで精神主義者であり、他の者に対しては唯物論者であり、自らに対しては自由主義者、他者に対しては統制主義者であり、そして

全く論理的に言つて、自らにたいしては目的論者、主知主義者、他者に対しては機械論者」（強調の傍点）安田。以下特に断らない限り同様）である（二二八頁）。

すなわちこうした二項対立は、自らには主体性をそして他者には機械的受動性を割り当てる学問的知のハビトウスが生み出したものなのである。

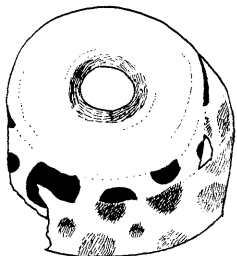
だから例えば経済学は、一方で「企業家」に対して「客観的チャンス合理的に評価する能力を」与える傾向と、他方で「自動調整される市場メカニズムに、選好を規制する絶対的力」を与えようとする傾向の「間を揺れ動いている」のである。つまり「経済学」は、一方で経営者に意識的な計算合理性を認めながら、他方で市場の論理の支配を認めるという矛盾した論理をもっているのである。また民族学者は、「交換という観念のもとに、ポトラッチやクラ」だけでなく、「触覚的器用さ（tact）、指使この機転、デリカシー、器用さ、ノーハウ」などの「実践感覚の言語で表現される民族学者自身

の社会的ゲーム」を考慮に入れていないので、もっぱら「機械論的モデルの言語」に頼ることになる。

「実践の論理」における時間

実践をその理論モデルと混同することは、「科学の時間」と「行為の時間」を混同することである。この混同は、「科学の時間と行為の時間とのアンチノミー、つまり科学の無時間的な時間を実践に押しつけて実践の破壊に行きつくアンチノミー」（二三〇頁）に陥ることになる。つまり科学がつくりだす実践の理論モデルからは時間が抜き去られているのに対して、実践には時間が決定的な条件として常に組み込まれているのである。実践は時間の展開の中でしか遂行されないことを忘れてはならない。

だから、「実践図式から



事後的に構築される理論的図式へと、実践感覚から理論モデルへ移行することは「実践の時間的現実をなすものを全て取り逃すことになる」。「これに対して、実践は時間の中で展開し、不可逆なものとして、共時化によっては破壊されてしまう相関的特性を全て備えている」

(一三〇頁)。

ここでブルデューがいたいことは、実践が時間と密接不可分な関係にあること、またここでいう「相関的特性」とは実践と時間是对応していることである。そして、実践に意味を与えるのがこの時間的特性である。すなわち実践のリズムやテンポ、また何よりも実践の方向性が実践の意味を決定するのである。このことは、音楽が「時間の芸術」であることを考えてみれば分かるであろう。

要するに、実践は持続性に内在しているので、時間と固く結びついている。さらに、実践が時間の中で展開されているということだけではなく、実践が時間を、とり

わけテンポを戦略的に使う点からもその結びつきは決定的である。

さて次いでブルデューは、学問的知の時間と実践の時間がなぜ異なるかを説明している。科学は時間を排除して実践を分析するのだが、なぜそうせざるを得ないのであろうか。それは、①「分析者はいつも遅れて「事が済んだ後に」やって来るので、到来する可能性のあることに不確かな気持ちでいることが出来ない」からである。

さらに②「分析者は、時間の効果を全体化する。つまり、それを乗り越える時間を持つからである」(一三二頁)。すなわち、学問的知が時間を排除せざるを得ないのは、その分析が常に「事後解釈」だからであり、さらに実践の全経過を一挙に見通す視点に立とうとするからである。だから、実践の時間はこの科学の時間とは全く異なるのだ。

たとえばゲームの場合を考えてみればよい。「ゲームに囚われている者は、彼が〔今〕見ているものではない

く、彼が予見しているものに、つまり直接今見ているものの中に在る予見されるものに自己を調整する」(三一頁)。たとえば、サッカー選手の放つパスを考えてみればよいであろう。仲間の今いるところではなく、これから向かおうとする地点に向かってパスはまわされるであろう。実践は来るべき未来に意味^サ方向^ンを見出すのである。

同時にそれは実践に急迫性をもたらす。すなわち「実践の本質的特性の一つは、まさにこの急迫性にある。この急迫性はゲームへの参加と未来を目の前にしている事の産物である」。だから「現実の世界、つまり現実に生きている世界を成している急迫性、呼びかけ、脅威、成り行きを消滅させようと思つたら、観察者のやるように、ゲームの外に、賭け金の外に身を置けばよいのである」。そうする者にとつてのみ「時間的継起が純粹な不連続として現れる」、つまり時間は止まる(二三頁)。

このようにゲームの参加者は、時間の意味形成力と時間

の支配(急迫性)に従属している。これとはちがつて、観察者や分析者の視点である学問的知は、実践の時間を「全体化」する。実践の時間を全体化するとは、実践を共時化して一気に捉えることである。

「一覽図式(学問的知)」と

身体図式(ハビトゥス)

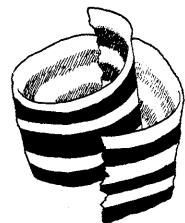
さらにブルデューは、身体化された分類図式であるハビトゥスと、学問的知が説明や分析のために作り出す「一覽図式」の違いを明らかにする。このことを通して、ハビトゥスの諸特性がネガティブ(否定的、陰画的)な形で浮き彫りにされる。科学は「実践の時間」の全体化(共時化、一覽化)、つまり無時間の「一覽図式」によつて生ずる効果を自覚しなければならない。その効果とは、分析者が現実の実践ではありえない等価や対立を、時間の全体化によつて累積・系列化する点にある。そこから、演技者の視点と見物人の視点を混同する

誤謬も生ずることになる。

そこでまず、科学がつくる「一覽図式」や「一覽表」を考えてみよう。この「一覽表」は、一連の流れの中でしか生起しえない実践を「同じ瞬間に見る」、すなわち「共時化」する。研究者は、その時々々に（一瞬々々に）しか語られないものを「累積し、系列化する」ことによつて「全体化の特権」を獲得することになる。その結果、重大な誤謬も生ずることになる。分析者は、「演技者と見物人の視点を混同する」（一三八〜九頁）ことになるからだ。だから研究者は、フィールドワークにおいて「実践が提起する必要があるから提起しない疑問」を実践者に投げかけ回答を得ようとする誤謬にも陥るのである。つまり研究者⇨見物人は、実践主体である演技者には思いも浮かばない疑問を突き付けるものなのである。こうして場合によつては、調査対象者は、予想外の質問に対する回答を即座に創作しなければならないことになる。

しかし、「実践の時間」

の停止によつて学問的知がつくる「一覽表」にもメリットがないわけではな
い。それをブルデューは



「全体化の特権」と呼んでいる。それは①実践的諸機能の中立化と②永続化（時間の廃棄）の手段（⇨フィールドでの聞き取り調査、文献資料の分析手段など）によつて可能となる。つまり①実践的諸機能の中立化とは、実践の諸機能である資本、場、地位などを中立化（無効に）する事である。つまり、見物人の視点から実践を見るのだ。たとえば「実践的投資の中断を前提として『理論的』質問をする状況の如き、調査が行う即自的中立化」である。また②永続化の諸手段とは、「文書や記録、分析のあらゆる技術（理論、方法、図式）」のことであり、調査や記録、分析では、「全体化の特権」が行使される。つまり、「時間的対立の完全な一列：

を、一つの空間に、そして同時に並べることによって、
〔農業暦のような〕カレンダーは、実践においては決して遭遇することがないので論理的には矛盾することになるが、実践的には両立可能な異なったレベルの諸標識の間に、実に多くの関係（例えば、同時性、継起、対称性）を創作することになる。しかし実践主体は、こうした一覧表を決してつくることはない。なぜか？ それは、「時間は」異なる状況で異なる行為者によって、継起的に使われ、又生活の必要は一覧的な把握を要求しないし、また急迫性がこのような把握を断念させるから、一度に全部を動員させることはないからである」（一三四頁）。これに対して「一覧表、系統樹、歴史地図、相関表」などの学問的な図式やダイヤグラムは、「線形的連続をなして意味を表す実践」を「一目で同時に全体」を把握することを可能にする。また、サイン・カーブは「要素間の対立や等価の関係を表現するのを可能にし、観察者は、実践者が知る事のできない「多様な区分

や下位区分」を識別する事ができる（一三五―一六頁）
（註5）。

だから、実践には「論理学でいう論理」とは違う論理を認めねばならないのである。なぜなら実践に論理学的な論理を求めると、実践にもそれなりの首尾一貫性が在る事を見逃してしまったり、逆に不自然な首尾一貫性を押しつけたりしてしまうからである。

とはいえ、学問的な理論化にも意味が無いわけではない。それは実践の論理の特性をネガティブな形で示す事ができるからである。このネガティブな形で示される実践の論理とは、①実践特有の首尾一貫性、すなわち実践の統一性と規則性と②実践にもなうボヤケや「近似性」である。これらは実践の論理であるハビトゥスの一つの特性である。すなわちハビトゥスとは、「相互に関連し一つの全体を成す生成原理に基づいて、すべての思考・認識・行為を組織する」ものである。ハビトゥスが行使できるのは「論理の経済が単純性と一般性のために

厳密性を犠牲にするからであり、また論理の経済が『複
数定立』のうちに多義性の巧妙な利用の条件を見つ
けるからである』（一四〇頁、註6）。

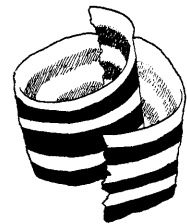
つまりハビトゥスは、それなりの首尾一貫性（客観的
条件と両立できると同時に、内在的に首尾一貫している
実践を産出できる）を保持しながらも、他方では「論理
の経済」に従って厳密性は二の次にして「ボヤケ」（ほ
ぼ、大体、おおよそのセンス）のうちに実践を組織する
のである。「論理の経済」は単純性と一般性を追求する。
その結果、実践には首尾一貫性と便利性がもたらされる
ことになる。

なぜか？ 実践においては、実践の生成図式（ハビ
トゥス）が異なる領域や状況に対して適応、応用される
からである。しかもこの適用は実践主体には、意識され
ることなく行われる（一四一頁、註7）。実践はハビ
トゥスの多様な領域への応用である。領域も状況もち
がっているのに経済効率の高さから、「領域の取り違え」

とは気づかれずに、この適
用は実行される。だから論
理的には矛盾するこの適用
や応用が気づかれないまま
になされるのである。

ハビトゥスはこうした「不確かな抽象」の論理に従っ
て、モノの分類（＝「等価と対立」の決定）を「重層的
に決定」し、さらにこの分類図式を「転調」させる。

要するに学問的知から見れば、こうした「重層的決
定」や「転調」は、論理的な「区別と連関」を超越した
「領域侵犯」であり、定義なしの「不確実な抽象」（＝
「ボヤケ」）であり、何もかもいっしょくたにする「包
括的類似性」である。しかしだからこそ逆に、それは
「実践の論理」においてはその「便利性」（＝「論理の
経済」）や「急迫性」故に、効力を発揮する。この点に
こそ、身体化された分類図式であるハビトゥスの特質が
あるといえよう。こうして、日常的な実践が始終くり返



す「等価」と「対立」の決定、すなわち「あれとこれは同じだ」あるいは「いや違うな」と言った分類作業は、「意識と言説の手前で作用する」（註8）身体化されたハビトウス（＝認知、評価、行為の原理）の根幹を成すのである。

（上越教育大学）

註

1 ピエール・ブルデュー『再生産』宮島喬訳、藤原書店、一九九一年、一二頁。同様の文言は『社会学の社会学』（田原音和監訳、藤原書店、一九九一年、二〇頁）にもある。

2 国語辞典では勘とは「五感では感じないことを感じとる、一種の感覚・能力」とある。（『岩波国語辞典』、岩波書店、二〇〇〇年、二三五頁）

3 ピエール・ブルデュー『構造と実践』石崎晴己訳、新評論、一九八八年、二三頁。

4 同書、一〇二頁。

5 この点は『実践感覚2』の二二八頁を参照。

6 この実践における「ボヤケ」の問題については、『構造と実践』の二二六頁においても指摘されている。

7 ブルデューは「男Ⅱ乾と女Ⅱ湿」の「同一図式」が、家の「内と外」で論理的「一貫性を欠いて適用される例をあげている。「家は、外部から男の視点から見ると、つまり外部世界と対立するものとして捉えられると、女性的・湿っぽいものとされるのに対して、∴自律した世界として扱われると、∴男性的―女性的な部分と、女性的―女性的な部分に分けられるのである。」（一四一―二頁）。

8 ピエール・ブルデュー『構造と実践』石崎晴己訳、新評論、一九八八年、九九頁。